必殺仕掛人

平四郎活人剣

上巻

藤沢周平

盗む子供

よくばり平四郎活人剣
盗む子供

藤沢周平

上巻

文藝春秋

平四郎活人剣（上巻）
盗む子供

昭和五十八年二月二十日　第一刷
昭和五十八年三月二十日　第二刷

著　者　藤沢周平（ふじさわしゅうへい）
発行者　半藤一利
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話代表（〇三）二六五―一二一一

定　価　九五〇円
本文印刷　理想社印刷
付物印刷　凸版印刷
製本所　中島製本

万一、落丁乱丁の場合は
お取替致します

© Shuhei Fujisawa 1983

Printed in Japan

上卷目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

辻斬り　七
浮気妻　三九
盗む子供　七一
逃げる浪人　一〇一
亡霊　一三五
女難　一六七
子攫(さら)い　一九七
娘ごころ　二三一

装釘　谷澤美智子

平四郎活人剣

（上巻）

辻斬り

一

与之平という家主は、理屈に明るく、弁も立つ男だった。とうとうとまくし立てた。

「明石さまからは、かねがねお三人で道場をおやりになるとうかがっておりました。してみますれば、残るお二人さまに損料を頂いても、いっこうに差しつかえないのではなかろうかと、あたくし思いましたのです」

「待て、待て、おやじ」

神名平四郎も弁舌とはったりではひけをとらない。凄味をきかせて家主を制した。

「それはなかろう。われわれ二人も明石に一杯喰わされたことでは、武具屋、米屋と同列だぞ。何を言うか」

「わかっておりまする。まずお聞きくださいまし」

与之平は金壺まなこを光らせて、平四郎と北見十蔵をひとにらみした。厚ぼったい唇に妙な迫力がある。

「そう思いましたのはほんとのことですが、失礼ながらお二人さまともにご浪人さん、損料をお払いになるお力などないことはわかっております。あの明石さま、いえ、この際は明石と呼び捨てにさせていただきましょうか」

「けっこうだ」
「あの明石に、お金を騙り取られたというご事情は、あたくしのあずかり知るところではございませんが、気の毒は気の毒。損料とまでは申しません」
「むろんだ」
と平四郎。
「しかしその上に、この建物をほかに貸すのをしばらく待てと申されましても、事情が事情、承服いたしかねますとあたくしも申し上げたいわけで」
「早速に借りたいと言う者でもおるのか？」
平四郎が聞くと、与之平はぐっと詰まった顔になった。すかさず平四郎が言った。
「このボロ家……」
平四郎は背後の建物の方に、ひらひらと指を振った。大げさに顔をしかめた。
「雨が降れば漏り、床は少なく見積っても三か所ほどは根太が腐っておる。ぎこぎこ言う。すぐには借り手もつくまい」
与之平はいやな顔をして、口をつぐんでいる。たたみかけて平四郎は言った。
「長く待てとは言わん。われわれもこのままでは腹が癒えぬゆえ、いまや必死に明石の行方を捜しておる。その消息がつかめるまで待てと申しておるのだ。どうかな？　おやじ」
「もし消息がつかめないときは、どうなさいます？」
「そのときは、さっぱりとあきらめる。貸そうが売ろうが勝手にしてくれ。しかしだ、もしやつをつかまえることが出来れば、そのときは味噌屋、米屋をひき連れて、おやじも乗りこめばよい。おやじの顔も立とうし、また違約の詫び料やら損料やらも少しは取れるかも知れんぞ。むろんわれわれは金

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

を取りもどし、この北見と一緒に改めて道場を借り受ける。な、八方うまく行くわけだ」
もっとも、つかまえたとき、明石半太夫が金を持っていればの話だ、と思い、それはきわめて望み薄だなという気もしたが、平四郎はそのことは黙った。
「よろしゅうございましょう」
考えこんでいた与之平が、ようやくそう言った。
「それではしばらく様子をみることにいたしましょうか」
「そう、そう。それが道理というものだ」
「しかし明石さまも罪なことをなさいます」
家主は、見つかる望みも少し出て来た夜逃げの主に、また敬語をもどした。
「あたくしはすっかりあの方を信用しておりました。年輩ではあり、失礼ながらお三人のうちでは風采も一番。なにせ堂々としたお方で、こういう方こそ道場をおやりになるにふさわしいと思いましたのです」
われわれもそれにだまされたのだ、と平四郎は腹の中で舌打ちした。
「くやしいのはちょうどそのころ、ほかからも借家の申し出があったことでございますよ。だがあたくしは明石さまの方を信用しました。それがこういうことになるのですから、世の中闇でございます。そのとき借りに参られた小宮山さまと申される方は、夜逃げもなさらずに、いまは塗師町に道場をお開きになったそうです」
家主の与之平の口調は、だんだん愚痴っぽくなった。

二

無念そうに唇を嚙んで建物を眺めている与之平を残して、平四郎と北見十蔵は西神田の表通りに出た。

「しかし、無理に待たしぇでも……」

それまでずっと無言だった北見十蔵が言った。北国のなまりがある。

「そう簡単に明石が見つかるかの？」

「見つけるのだ」

平四郎は険しい顔つきで、年長の友人に嚙みついた。

「貴公は有り金を出したといっても、寺子屋の師匠という暮らしのたつきがある。明日の米に困るわけではあるまい。だがおれはそうはいかん。やつが見つからねば、身の破滅だ」

芝露月町の裏通りに、雲弘流の矢部三左衛門が道場を開いている。神名平四郎はそこの高弟で、北見十蔵、明石半太夫は時おり来て門弟を指南する、いわば賓客待遇の剣客だった。

雲弘流の正統は江戸に伝わっているが、流派の祖井鳥巨雲は、もと仙台藩士で、また巨雲の子五郎右衛門は肥後細川藩に仕えた。北見は仙台浪人、明石は肥後浪人である。北見は国元で、雲弘流のもととなった弘流を学び、また明石も肥後雲弘流をおさめていたので、江戸に来てから矢部とつき合いが出来、やがて道場に出入りするようになった。

ことに明石は熱心で、いま思い合わせればすでにそのとき怪しむべきだったのだが、ついに妻子を連れて道場に住みこむまでになったのである。つまり賓客から食客に下落したわけだが、当時は誰もそうは思わなかった。

明石は齢は四十恰好だが、上背のある堂々たる体軀を持ち、鼻下には品よく刈りこんだひげまで蓄えている。時おり出る国なまりに多少の難があるぐらいで、人品骨柄、とても妻子連れの居候には見えない。明石は先生と呼ばれた。事実国元仕込みの雲弘流の腕は確かなものだった。

矢部道場は、建物が少し手狭になったなどという話が出るほど繁昌している。手不足だった。従ってずるずる入りこんで来た形の明石を疑うものなどは師匠をはじめ一人もおらず、矢部は離れのひと部屋をあたえて、この食客を大いに徳としていたのである。繁昌している道場は鷹揚だったのだ。

平四郎と北見に、ひとつ道場を興そうではないかと持ちかけたのは、むろん明石である。じつは自分は二十両の貯えを持っていると明石は小声で打ち明けた。あと二十両もあれば、しかるべき空き道場を借り、竹刀、防具をそろえるぐらいは出来る。なあに、金は半金も払えばよか、あとは弟子が持参する束脩でもって、難なく払えようと明石はいとも簡単に言ったのである。

平四郎は知行千石の旗本の子弟、といえば聞こえはいいが、内実は死んだ父親の妾腹の子で神名家の厄介者である。当人も自分の立場を先刻承知していて、隙あらば屋敷を飛び出すつもりでいたので、一も二もなくその話に乗った。北見も浪人して三年、寺子屋の師匠で喰うには困らないものの、鼻たれのガキを教えるのには倦きが来たとみえて、これも乗った。

北見が十両出し、平四郎が五両出した。その金を握って、明石はあとはまかせておけといったが、押し出しが立派なので話はすぐにまとまるとみえ、西神田蠟燭町に間もなく空き道場を見つけた。さっきの与之平の持ち家がそれである。

古びて道場の床が少し傾いてみえるその家を、平四郎と北見は一日置きにのぞきに行った。そのつど、明石に門人の申し込みはどのぐらい来ているかとたずね、はやくも武具屋からとどいて壁にかけてある防具をつけて、二人で嬉々として竹刀を打ち合ったのだから、無邪気な話だった。

道場につづく母屋に、明石の妻女と子供二人が引っ越して来て暮らしはじめたのは知っていたが、別に気にしなかった。道場主には年配りから見てくれから、明石を据えるのが穏当、ただし道場の実入りは三人で分ける。そういう話がついていた。

その結構な思惑が、一夜にしてひっくり返ったのが昨日のことである。例によって北見十蔵を誘って蠟燭町に行った平四郎が見たのは、ガランとして人気のない道場と、その前に突っ立っている仏頂づらの家主だけだった。壁に稽古道具は残っているものの、明石も妻子も見当らず、所帯道具までさっぱりと姿を消していた。

ひととおり家の中を検分して、玄関先にもどったが、平四郎も北見も顔見合わせるだけで声も出なかった。ようやく平四郎が、どっかに遊びに出たのではあるまいなと言ったが、与之平にあわれむような眼で見られただけだった。

「どこの世の中に、鍋釜まで持参して遊びに出るひとがありますか。夜逃げに決まってます」

与之平が指さした地面に、くっきりと車の轍(わだち)の跡が残っていた。

明石は鍋釜はむろん、米、味噌のはてまで全部持って行った。全部ツケの品物である。明石は越して来ると毎晩のように晩酌をやっていたというが、その酒もツケだった。明石は狡猾で、米屋、酒屋をまず道場に案内し、壁にかかっている稽古道具を見せて信用させたらしい。その稽古道具もほんの手金を払っただけだったと与之平は言い、最後にとどめを刺すようにこう言った。

「あたしも怪しいと思っていました。道場を開くというのに、出入りするのは小商人ばかりで、お弟子入りのひとなど一人もみえませんでしたからな」

「一人も？」

平四郎と北見は、絶句してまた顔を見合わせた。明石は二人が顔を出すと、一昨日は二人、今日は

一人と入門申し込みの人数を数えあげて指を折り、十人も揃ったらいよいよ道場びらきといくかと、陽気な声をはり上げていたのである。

だが、与之平の言うことを信用するしかなかった。与之平の家はすぐ隣で、新来の店子を案じて、ひまがあれば垣根のむこうからこちらの様子を窺っていたのだという。

その与之平も、夜逃げの気配までは見抜けなかったのである。

すぐにも貸し家札を貼り出すといきまく与之平をなだめ、北見が心魂をこめて書いた雲弘流指南の看板を抱えて茫然として昨日は家にもどったが、いい知恵も浮かばないままに今日また出直して家主に会いに行ったのである。

どうにかボロ道場を押さえはしたものの、二人の足は弾まなかった。道はやたらに人が混んでいる。この人混みの中から、早急に明石を捜し出すなどということが出来るものかどうかと、平四郎は憂鬱だった。

三

「明石は浪人して何年になるかな？」

平四郎が言うと、北見は、十五年と言った。

「そんげに聞いておるぞ」

ふむ、十五年かと思いながら、平四郎は背筋のあたりにうすら寒いものを感じた。十五年も浪人暮らしをすると、ああいう破廉恥なことも平気でやるようになるかと思ったのである。まさか米屋や酒屋が訴えて出るとは思えないし、平四郎にしても虎の子の五両をかすめ取られて頭に来てはいるものの、訴えてやるかとまでは思わない。明石の夜逃げにはそこまで読んだ悪質なものが感じられた。

「女房が若かったな」
平四郎は、明石の妻のことを言った。細面のなかなかの美人で、もてなしは手厚く笑顔に愛嬌があったのをおぼえている。
「まだ二十半ばだったろう。あの女房どの、武家の妻にしては愛嬌があり過ぎたように思わんか？」
「むかしは水茶屋に働いていた女子だ。そこで明石と仲好うなった」
「ふふん、あのひげにいかれたわけだ」
平四郎は冷笑したが、北見は黙々と歩いている。北見はどちらかといえば口の重い男だった。浅黒くて馬のように長い顔に、吊り気味の眼、大きな口がいかめしいが、人柄は温厚で、手習いの子供にも、子供の親たちにも慕われているらしい。二人は紺屋町まで来た。
「寄っていかぬか。貰い物のうまい茶がある」
めずらしく、北見が自分から誘った。北見は、この町の糸屋の離れを借りている。離れは糸屋の先代が隠居所に建てた部屋で、店の方に回らなくとも裏木戸から入れるようになっている。北見は藩江戸屋敷にいる知人の口利きで、この部屋を借りていた。
離れに行くと、あねさんかぶりに頭を覆って手に箒を持った女が出迎え、先生お帰りなさいましと言った。三十近い大年増だが、肌が白く眼の大きい美人だった。
「お留守中に、お掃除をさせてもらいました。すぐに済みます。それまでお部屋で休んでいてくださいまし」
女はそう言って、平四郎にも今日は暑うございますねと愛想をふりまき、台所の方に姿を消した。
二人は手習いの子供の机が並んでいる部屋に行った。離れは糸屋の裏庭の隅にあって、その部屋に坐ると、ちょうど坪庭の池を眺める位置になる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com